

Deterministic Implication of Diodorus Cronus' Modal Theory

Yasuhiro WAKIJO

Diodorus Cronus (died c. 284 B.C.) developed a modal theory which influenced, together with his disciple Philo's revised version, the Stoic philosopher Chrysippus, who subsequently established his own theory on possibility and necessity. Diodorus' theory was criticized for its deterministic implication by other Hellenistic philosophical schools, including the Stoics. This research note gives a concise reconstruction of his theory, and examines how and to what extent his theory implies determinism. If we take into account the restrictions which were generally shared by the Hellenistic philosophers on the acceptable forms of propositions, we find that it is not as easy as it seems at first to demonstrate that Diodorus' modal theory has decisive deterministic implication. In view of this, we can understand why historical criticism in that period was almost exclusively focused on the problem of counterfactual possibility, which the theory of Diodorus clearly rejected.

〈研究ノート〉

ディオドロス・クロノスの様相理論の 決定論的含意について

脇 條 靖 弘

1 はじめに

本稿では、古代ギリシア、ヘレニズム時代始めのディオドロス・クロノス (B.C.284年頃死去) の様相理論を取り上げる。彼の理論は、弟子のピロンを経てストア派、とりわけクリュシッポスに影響を与え、ストア派の様相理論の形成に大きな役割を果たしたと考えられる。ディオドロスの理論は決定論的含意をもつ点で他学派からの攻撃の対象となった。本稿では、ディオドロスの理論の内容を整理して提示した上で、その決定論的な含意の内実を確かめる。当時許容されていた命題の種類に限定があったことを考慮するなら、ディオドロスの理論に見出される決定論的含意を示すのは見かけほど容易ではないことが明らかになるだろう。

最終的な研究の目的はストア派の決定論、両立可能論の検討であるが、本稿はそれに向けた予備的考察である。

2 共通の前提

2.1 命題の真偽

さて、ディオドロスの理論における命題の様相を論じる前提として、まず、命題の真偽の取り扱いについていくぶん念入りに確認しておきたい。一般にヘレニズム時代の議論においては、命題の真理値は「 p は t において真 (偽)」というように、時間指標を伴って付与される。また、その際真理値は個々の命題の発話トークンに付与されるというよりは、むしろ、発話可能性の時点に相関して命題タイプに直接付与されると理解するのが自然であると思われる。そのように考えれば、たとえある時点で実際の発話がなくても命題タイプは真理値をもちうる。たとえば、命題タイプ「(今) 昼である」が t において真であ

るのは、(このタイプの命題の一つの発話トークンが t においてある話者 s によって生じた場合も生じなかった場合でも、) t においてある特定の出来事(太陽が天空上を通過しているという出来事)が生じているとき、そしてそのときのみである。多くの現在形の命題、たとえば「ディオは散歩している」についても同様である。未来時制の「ディオはメガラに行くだろう」については、この命題タイプが t において真であるのは、(この命題の一つの発話トークンが t においてある話者 s によって生じた場合でも生じなかった場合でも、) t より後のある時点である特定の出来事(ディオがメガラに行くという出来事)が生じているとき、そのときのみである。過去についての命題も同様である。たとえば、命題タイプ「ソクラテスは従軍した」が t において真であるのは、(このタイプの命題の一つの発話トークンが t においてある話者 s によって生じた場合も生じなかった場合でも、) t より前にソクラテスの従軍という出来事が生じていたとき、そのときのみである。

一般に、何らかの出来事が生じることを述べる命題の真理値は次のような形で決まる。

命題 p が t において真であるのは、その命題の述べる出来事 e が t と適切な時間的前後関係で生じているとき、そのときのみである。

この点については、ディオドロス、ピロン、クリュシッポスの間に違いはない。

2.2 扱われる単純命題の例

様相理論を論じる際に、ディオドロスをはじめヘレニズムの哲学者が用いた典型的な単純命題は、すでに取り上げている「(今) 昼である」、「ディオは散歩している」、「ディオはメガラに行くだろう」というような命題である。これらの命題は、一般に発話時点によって真理値が変わるという意味で、時間指標的な命題である。また、これらの哲学者たちが取り上げる例の大多数は、それを真にする出来事が複数存在するという意味で、多重実現可能性をもつ命題である。たとえば、「ディオは散歩する」は、複数のディオの散歩が生じ得て、そのそれぞれがその命題のさまざまな可能的な発話トークンの時点でその命題を真にするであろうような命題である。その意味で、「ディオは散歩する」は複数のディオの散歩によって多重的に実現される可能性を持つと言える。この

ことを、命題の Truth Maker (TM) という概念を用いて記述してみたい。命題の Truth Maker とは、それが存在するならばある時点で命題が真となるようなそのような存在者のことである。たとえば、昨日のディオの散歩という出来事を $W1$ とすると、 $W1$ は、それが存在するならば「ディオは散歩した」という命題が今真になるような、そのような存在者であり、その命題の TM である。しかし、この命題の TM は論理的には (=いかなる可能世界においても)、独立したものとしては*1ただ一つであるとは限らない。ディオが何度も過去に散歩しているなら、 $W1$ 以外に他にもその命題の TM は現実存在する。さらに、たとえディオが過去に一度しか散歩しなかったとしても、たとえば人間の誕生とは違って人間の散歩というものが過去において一度きりであるという論理的制限がない (つまり、ある可能世界でディオは複数回散歩している) ので、この命題の TM は論理的に一つではない。このように、ある命題の TM が論理的に一つではない場合、その命題は多重実現可能性をもつことにしよう。

多重実現可能性をもたない命題のうちには、まず、発話の時点が論理的にその真理値に影響しない非指標的なタイプの命題 (永遠命題) の一部がある。*2 これには、おそらく「 $2 + 2 = 4$ 」のような数学的命題や、「全体は部分を含む」というような論理的命題が含まれる。これらの命題の TM が (あるとすれば) 独立して二つ以上あるとは考えにくいだろう。また、偶有的な出来事を固定的に指示して、それについて無時間的に語る命題の多くも多重実現性を持たない。「ロンドンオリンピック100m でボルトが優勝」は、無時間的に理解した場合、その TM が独立して二つ以上あるとは考えられない。*3 「オバマ大統領は金曜日に誕生」や「ディオは海で死亡」も無時間的に理解した場合、これらの TM が人間の誕生や死という出来事であり、いかなる可能世界において

*1 この「独立したものとして」という条件は直観的に理解できるという前提で本稿では議論を進める。出来事が時間、空間的な位置を持つ場合、独立した出来事は共通した位置をもたない。

*2 永遠命題には、もちろん、多重実現性を持つものもある。たとえば、「ディオは散歩する」は、無時間的に解釈されたとき、多重実現性を持つ。

*3 もちろん、偶有的事実を固定的に指示して、それについて無時間的に語る命題の中にも多重実現性をもつものもある。たとえば、「ロンドンオリンピック100m でのボルトの優勝の後に太郎は悪態をついた」は、広い意味でロンドンオリンピックという出来事を固定的に指示してそれについて語る命題であるが、多重実現可能性を持つ。たとえば、優勝の三日後の太郎の悪態と優勝の一年後の太郎の悪態は、どちらもこの命題の TM である。

も人間が一度だけ生まれたり死んだりするのであれば、多重実現性を持たない。

さらに、非指標的な命題（永遠命題）以外にも、多重実現可能性をもたない命題は存在する。たとえば、個別的な出来事を固定的に指示し、それについて語る命題の中には、指標的であっても多重実現可能性をもたないものがある。たとえば、「ロンドンオリンピック100mでボルトが優勝した」は、ロンドンオリンピックという個別的な出来事を固定的に指示し、それについて今真である過去形の命題である。そして、ロンドンオリンピックの前後でその真理値は異なる（ロンドンオリンピック以前の時点では少なくとも真ではない）のでこの命題は指標的である。しかし、この命題は多重実現可能性をもたない。また、個別的な出来事を固定的に指示していなくても、多重実現可能性をもたない命題も存在する。たとえば、「ディオは海で死ぬだろう」（未来形）や「オバマ大統領は金曜日に生まれた」（過去形）は、*⁴ やはり人間の誕生や死がいかなる可能世界においても一度だけであるならば、多重実現可能性をもたない。

さて、ディオドロスらが扱う命題の例は、そのほとんどが多重実現可能性をもつものである。また、彼らは日付（date）を伴った命題をほとんど用いていない。決定論との関係においてとりわけ問題になる未来を予想する言明については、これらの哲学者たちは、たとえば「ソクラテスの刑死から3年後にプラトンはイタリアを初訪問するだろう」とか、「オバマ大統領は2014年2月14日の昼食にサンドイッチを食べるだろう」とか、「2014年1月のセンター試験の一週間前に太郎はインフルエンザにかかるだろう」というような、特定の日付（date）を伴った未来命題を取り上げない傾向があるわけである。そして、そういった命題の多くは多重実現可能性をもたない。

日付の時間は動く〈今〉のない静的な時間であり、マクタガートにしたがって「B系列の時間」と呼ばれる。（それに対して動く〈今〉を持つ、現在、過去、未来という時制（tense）の時間は「A系列の時間」と呼ばれる。）B系列の時間の本性は、出来事の前後関係にある。「2014年2月14日」という日付は、ある特定の出来事（たとえばキリストの誕生）からある一定の時間（2014年＋数年）を隔てた時間を意味する。そして、ヘレニズム時代の哲学者たちの用いた言語においても、なんらかの出来事の固定的な指示が可能なはずである。たとえば、後で見るように未来の出来事の固定的指示（たとえば明日の「ソク

*⁴ これら二つの命題は、個別的な人を固定的に指示しているが、個別的な出来事を固定的に指示してはいない。

ラテスの処刑」]が不可能であったとしても、すくなくとも、過去や特に現在の出来事の固定的指示（たとえば、昨日の「ソクラテスの処刑」や今進行中の「ソクラテスの処刑」]は可能であろう。その出来事からの隔たりを表現する命題（たとえば、「ソクラテスの処刑から20年以内にプラトンは死ぬだろう」]が形成できる以上、特定の日付（date）を伴った未来命題が彼らの理論から除外されるとみなす理由はないように思われる。

3 ディオドロスの様相理論の影響

さて、すでに見たように、真偽が命題タイプに付与されるとすると、その真偽は時間に相関的であることは明らかである。異なる時点で真理値が異なる指標的な命題タイプが存在するためである。しかし、この命題の様相的特性（必然、可能等）はどのようにして決まるのか。これが当事の哲学者の間で議論となった問題で、ディオドロス、ピロン、クリュシッポスの三人の哲学者はそれぞれ異なる理論を提出した。

本題であるディオドロスの様相理論に向かう前に、ディオドロスの様相理論がどのような形でピロン、クリュシッポスのそれに影響を与えたかを簡単に見ておくことにしたい。後で詳しく見るように、ディオドロスの様相理論は、命題の可能性、必然性をもつばら命題の真理値の取り方によって定義するものである。ここに決定論的含意があるかどうかが本稿の主題であるが、彼らの主たる批判の矛先は、実現されない可能性をディオドロスの理論が排除してしまうことに向けられた。たとえば、太郎が生涯一度も大阪を訪れることがなかったとするなら、太郎の生涯のどの時点においてもそれは不可能であった、というのがディオドロスの理論の帰結である。これに対してピロン、さらにクリュシッポスがどのような理論を提出したか、を以下簡単に見ておく。

3.1 ピロンの様相理論

ピロン（B.C. 3世紀末から2世紀初頭）の様相理論^{*5}によれば、命題の様相を決めるのはディオドロスのように命題の真偽そのものではなく、真であること、あるいは偽であることに対するその命題の内的な許容性である。おそらくすべての命題はなんらかの事物に関するものであると考えられており、その事

*5 最も重要な典拠は、Boethius *Int.* II 234, 10-22である。

物が、命題が真であることを許容するような性質を保持しているとき、そのときにのみ、その命題は真であることに対する内的な許容性を持つ。同様に、その事物が、命題が偽であることを許容するような性質を保持しているとき、そして、そのときにのみ、その命題は偽であることに対する内的な許容性を持つ。

命題の内的な許容性は時間によって変化しうる。その命題の様相について問題となっている事物の内的な性質は変化しうるからである。たとえば、太郎がある時点で散歩する能力を保持していたとしても、ある事故の後遺症でその能力を不可逆的に失うことがある。その場合、ある時点で「太郎は散歩する」は可能であったのが、別の時点でそうではなくなった、と考えられる。^{*6}

ピロンの様相理論の要点は、以下のようにまとめられる。まず、命題の様相の定義である。^{*7}

命題 p が t において可能であるのは、命題 p が t において正の内的許容性を持つとき、そのときのみである。

命題 p が t において必然であるのは、命題 p が t において負の内的許容性を持たないとき、そのときのみである。

ここで用いられている命題のある時点における正、負の内的許容性は次のように定義される。

命題 p が t において正の内的許容性をもつのは、その命題の様相にかかわる対象 o が、 p が t 以降にのある時点で真であることを許容する内的な性質を t において保持しているとき、そのときのみである。

命題 p が t において負の内的許容性をもつのは、その命題の様相にかかわる対象 o が、 p が t 以降のある時点で偽であることを許容する内的な

^{*6} これに反して、Bobzien は、ピロンによれば、命題の様相的特性は変化しない、と解釈している。S. Bobzien, *Determinism and Freedom in Stoic Philosophy*, 1998 Oxford, 110.

^{*7} ディオドロス、ピロン、クリュシッポスの三人を含め、一般にヘレニズム時代の哲学者の様相理論においては、可能性と必然性は通常の仕方でも相互に定義可能である。つまり、「 p が必然である」は「not- p が不可能でない」と等値であり、「 p が可能である」は「not- p が不可能ではない」と等値である。

性質を保持しているとき、そのときのみである。

これによってピロンの理論は、「太郎は大阪に行くだろう」というような実現しない可能性を確保できる。太郎が生涯一度も大阪に行かなかったとしても、太郎がこの命題の様相にかかわる事物であり、その太郎が命題に言われている事態を許容する内的な性質を保持しているかぎり、この命題は可能である。

他方、ピロンの理論によれば、命題の様相に外的な障害の有無は関係しない。たとえば、ある木片が海底に沈んでいるときでも、「その木片が燃える」という命題は内的な許容性を持ちうる。この命題はその木片に関する命題であり、その木片が「燃える」という事態にいたるのを許容するような性質を保持しているなら、たとえ、外的な傷害（この場合周りの膨大な海水）があってもこの命題は可能なのである。^{*8}

3.2 ストア派の様相理論

クリュシッポス (c.280～c.206) の様相理論は、ピロンのそれをさらに発展、洗練させたものであると言える。^{*9} 彼の理論は、ピロンの導入した命題の内的許容性という観点を引き継ぎ、さらにそれが内包する要素のうちで、ピロンの理論が放置していた外的な要因の方にも視点を向ける。その結果クリュシッポスの理論は、実現しない反実可能性の範囲を制限することに成功している。たとえば、海底深く沈んだままの木片について、「それが燃える」ことは、たとえ木片が内的に燃えることを許容するとしても、外的な要因（とりかこむ海水）がその実現を妨げるので、不可能とみなされる。

クリュシッポスの様相理論の要点は以下のようにまとめられる。

命題 p が t において可能であるのは、命題 p が t において正の内的許容性を持ち、かつ、 t において外的障害が、 p が t 以降のある時点で真であることを妨げないとき、そして、そのときのみである。

命題 p が t において必然であるのは、命題 p が t において負の内的許容

^{*8} Cf. Alex. *An.pr.* 184.6-10.

^{*9} 主要な典拠は、DL. 7.75; Boethius *Int.* II 234-5, 393; Plut. *Stoic rep.* 1055d-f; Cic. *Fat.* 12-15; Epict. *Diss.* 2.19-1-5 などである。

性を持たないか、または、持ったとしても t において外的障害が、 p が t 以降のいかなる時点においても偽であることを妨げるとき、そして、そのときのみである。

4 ディオドロスの様相理論

4.1 理論の提示

4.1.1 様相的特性

さて、本題のディオドロス・クロノスの様相論理である。^{*10} ピロンやクリュシッポスとは違って、ディオドロスの場合、命題の様相的特性はもっぱらその命題の時間相関的な真理値によって定義される。彼の様相理論の要点は以下のように整理できる。

(1) ある命題がある時点 t (を含めそれ) より後のいかなる時点においても真であるとき、そのときのみ、その命題は t において必然である。

(2) ある命題がある時点 t (を含めそれ) より後のいかなる時点においても偽であるとき、そのときのみ、その命題は t において不可能である。

(3) そのどちらでもない場合、つまり、ある命題がある時点 t (を含めそれ) より後のある時点においては真であり、ある時点においては偽であるとき、そのときにのみ、その命題は t において偶有的である。

このように、ディオドロスの様相理論において、必然性の本性は「今後常に真である」ことにある。同様に、不可能性の本性は「今後常に偽である」ことなのである。彼の理論によれば、命題の真理値だけでなく様相的特性も時間に相関的である。つまり、異なる時点で同じ命題の様相的特性が異なることがありうる。たとえば、「太郎は大阪を訪問した」(過去形) は、太郎の最初の大阪訪問があったとしてそれ以前の時点においては必然でも不可能でもないが、それより後においては必然である。この命題は、必然になった、のである。

^{*10} 主要な典拠は、Boethius *Int.* II 234.22-6 である。

■**必然命題** (1) の必然命題の中には、まず、普遍的真理（数学的、論理的真理）と真なる永遠文がある。これらは、ある時点で必然になる命題ではなく、あらゆる時点で必然な命題である。あらゆる時点において必然である命題としては、他にも、常に生じている出来事があるとすればそれが生じることを述べる真なる命題、たとえば、宇宙が常に変化しているとするならば「宇宙に変化が生じている」（現在形）や、果てしなく繰り返し生じる出来事についての未来命題「昼になるだろう」（昼夜が永遠に繰り返すとして）がある。その他の真なる未来命題については一般に必然にはならない。たとえば、「ディオは死ぬだろう」は、未来形である以上ディオの死後においてすくなくとも真ではないので、真ではあるが必然ではない。

過去命題については、特定の出来事を固定的に指示し、それが生じたことを過去形で述べる真なる命題はすべて必然になるが、もちろんこれはその出来事の生じた時点以降においてである。たとえば、「ロンドンオリンピックの100m走でボルトが勝利した」（過去形）は、その勝利より後の時点で必然である。一般に（特定の出来事でなくても）過去にある種の出来事が生じたことを述べる真なる命題はすべて必然になる。たとえば、「ディオはメガラに行った」は何か特定の出来事を固定的に述べるものではないが、それが今真なら、これからもずっと真であり、それゆえ必然である。^{*11} このことは、後で見るように、ディオドロスの「支配する者の議論」において前提のひとつとして用いられる。

■**不可能命題** (2) の不可能命題の例としては、まず、あらゆる時点で不可能な命題としては、普遍的虚偽（数学的、論理的虚偽）がある。また、偽なる永遠文はすべて不可能となる。また、事実上いかなる時にも実現することのな

^{*11} しかし、広い意味で過去の出来事（たとえそれを固定的に指示したとしても）について述べる真なる命題がすべて必然になるとはかぎらない。たとえば、「太郎が初めて大阪を訪れるのは、ロンドンオリンピック100mのボルトの優勝の10年以上後であろう」（未来形）は、広い意味でロンドンオリンピック100mのボルトの優勝という過去の出来事についての命題であると考えられるが、これが真であったとしても、必然とはかぎらない。たとえば、太郎が優勝の11年後に生涯一度だけ大阪を訪問したとすれば、この未来命題は今（優勝の後10年以内のある時点）真であるが、その訪問以降の時点で（未来命題である限りすくなくとも）真とは言えず、それゆえ、必然ではない。

い出来事について、その出来事が実現した、している、するだろうことを言う命題もすべてあらゆる時点で不可能である。^{*12} たたとえば、ある宝石が人間によって碎かれることはなかったとすると、「この宝石は人間に碎かれた」（過去形）、「この宝石は人間に碎かれている」（現在形）、「この宝石は人間によって碎かれるだろう」（未来形）はいずれもあらゆる時点において不可能である。当時ディオドロスに向けられた批判のほとんどは、この点に向けられた。

また、一度は実現したとしてもある時点 t 以降に事実上実現しない出来事について、その出来事が現在生じていることを言う命題、たとえば、「ディオはメガラに行く（居る）」（ディオが t 以降に一度もメガラに行くことがなかったとして）や、そういう出来事が未来において生じるだろうことを言う命題、たとえば、「ディオはメガラに行くだろう」は t において不可能な命題である。

他方、過去に生じなかった出来事について、生じたと言う命題は今偽であるが不可能であるとは限らない。たとえば、「ディオはコリントスに行った」は今までディオがコリントスに行ったことがなければ、今偽であるけれども、将来ディオがメガラに行くなら（そのとき以降の時点において真であるので）不可能命題ではない。

未来に生じる出来事について、それが生じないことを述べる偽なる命題は不可能であるとは限らない。たとえば、「太郎は3年以内に大阪を訪れることはないだろう」は、偽であるなら、太郎の3年以内の大阪訪問という実際に生じる出来事についてそれが生じないことを述べているが、これが今偽であったとしても、いずれ真になるので不可能ではない。現在生じている出来事について、それが生じないことを述べる命題も同じように不可能とは限らない。「太郎は大阪を訪問中ではない」は、今偽であるとしても、（太郎が今後生涯ずっと大阪を訪問中でないかぎり）将来真になるので、不可能ではない。

他方、過去に生じた出来事について、それが生じないことを述べる命題は、一般に不可能である。「過去に起こった出来事は取り消せない」わけである。それに対して「過去に起こらなかった出来事は将来は起こるかもしれない（そしてそれが過去になる）」ので、先に見たように、過去に生じなかった出来事

^{*12} もちろん、事実上いかなる時にも実現することのない出来事「について」述べる命題には真なるものもあるので、そういう命題がすべてが不可能なのではない。たとえば、「ロンドンオリンピックでの大規模テロは生じなかった」は、そのテロという実現することのなかった出来事「について」の命題であると考えられるが、真である。それゆえ当然不可能でない。

について、生じたと言う命題は不可能であるとは限らないのである。この点は、ディオドロスの理論における興味深い非対称性である。

■偶有命題 デイオドロスの理論においては、(3)の命題が存在する。したがって、ディオドロスの理論がなんらかの意味で決定論的であるとしても、それはあらゆる命題が必然か不可能になるという意味でそうなのではない。たとえば、「(今) 昼である」(現在形)は、必然でも不可能でもない偶有的な命題である。また、ディオドロスの理論によれば、ディオオが生きているいかなる時点においても「ディオオは死ぬだろう」は必然ではない。なぜなら、ディオオが死んだ後の時点でこの命題が発話されたとき、その命題はすくなくとも真ではなくなるからである。

4.1.2 「支配する者」の議論の役割

ディオドロス・クロノスの有名な「支配する者の議論 (Master Argument, *ho kyrieuōn logos*)」は、^{*13} 彼の様相理論のサポートの役割を果たしていると考えられる。ディオドロスの様相理論によれば、上の(2)から、ある時点 t (を含めそれ) より後のいかなる時点においても偽である命題は不可能である。したがって、 t より後のどの時点でも現実に生じない出来事についてそれが生じると言う命題は(偽であるだけでなく)不可能である。つまり、ディオドロスの理論では反実的可能性は排除される。たとえば、すでに見たが、太郎が生涯一度も大阪を訪れないとすれば、「太郎は大阪を訪問する(だろう)」は不可能である。一般にこの帰結をサポートする役割を「支配する者の議論」は果している、と考えられる。

この議論の一つの再構成の仕方を示す。^{*14}

命題1 過去についての真なる命題はすべて必然である。^{*15}

命題2 不可能なことが、可能なことから帰結することはない。

命題3 実現しない可能性がある。

^{*13} Cf. Epict. *Diss.* 2.19.

^{*14} この再構成は、Long and Sedley に従った。Cf. A. A. Long and D. N. Sedley, *The Hellenistic philosophers*, 1987 Cambridge, vol. 1, 234.

^{*15} 広い意味で過去について述べる命題のうちには必然でないものもある。注*11参照。命題1の「過去について」はそれより狭い意味である。

「支配する者の議論」は命題1と命題2を受け入れるなら、命題3が否定できることを示す議論である。それによってディオドロスは反実的可能性を否定するのである。たとえば、太郎が結局生涯支配することのない者だとする。以下の二つの命題を考える。

- (i) 太郎は今支配している（現在形）。
- (ii) 「太郎は支配するだろう」はずっとそのとおりであった（過去形）。
- (iii) 「太郎は支配するだろう」はずっと偽であった（過去形）。

(iii) は過去の真理であるので、命題1によって必然である。したがって、それと矛盾する(ii)は不可能である。ところが、(ii)は(i)から帰結するので、命題2により(i)も不可能である。

4.2 ディオドロスの様相理論は決定論を含意するか

(A) ある出来事が生じることを述べる命題がある時点で必然であれば、それはその出来事が決定されていることを含意するとさしあたり考えられる。また、(B) ある出来事が生じることを述べる命題がある時点で不可能であれば、それはその出来事が生じないことが決定されていることを含意するとさしあたり考えられる。(A)については、ディオドロスの理論によれば、まず過去の真なる命題があるが、こういった命題が必然であることは当時の哲学者に共通の考えであって批判の対象とはならなかった。また、常に生じている出来事や果てしなく繰り返し生じる出来事についての真なる現在、未来命題も、その必然性は受け入れられるだろう。未来命題は一般に必然にはならないので、問題は、現実生じる出来事が生じることを述べる無時間的な永遠命題である。「太郎は大阪を訪問するだろう」(未来形)は、真であっても必然ではないが、「太郎は大阪を訪問」(無時間)は、このような無時間的な表現が許されるなら必然である。

(B)についてはどうか。最も大きな問題は、ディオドロスの反実可能性(一度も実現しない可能性、今後実現しない可能性の両方を含めて)の拒否であろう。当時の批判がここに向けられていることは繰り返し述べた。それ以外には、問題となる不可能性は見当たらない。

4.2.1 固定的な指示と未来時制

以下主に (A) について考察したい。まず、未来の出来事を直接固定的に指示する方法があるかどうか、この問題と関連するかどうかを考察したい。未来の出来事について固定的指示は、ことがら自体として相当疑わしいものである。もしそういう指示の方法があり、さらに無時間的な命題が許容されるなら、ディオドロスの様相理論からは、そのような指示が可能な出来事は全て必然であることが帰結する。たとえば、「第三次安倍内閣の組閣」という語で直接ある未来の出来事を固定的に指示できるとすれば、「第三次安倍内閣の組閣が生じる」(無時間) は、真であれば必然であり、偽ならば不可能である。すべての命題は真か偽であるとすれば、これは、第三次安倍内閣の組閣が生じるかどうかは決定されている、という議論を誘発する。

ただ、まだ存在しない未来の出来事を固定的に指示することはおそらく不可能である。私はまだ存在しない出来事を「これ」と明示的に指してそれに固有名を与えることはできないであろう。そうだとすれば、「第三次安倍内閣の組閣」という語は固定指示詞ではなく、たとえば、「安倍晋三が組閣する三回目の内閣」というような確定記述として機能するものにすぎないであろう。^{*16}

しかし、未来の出来事の固定的指示ができないとしても、決定論的含意を導く同様の議論は構成できる。「安倍晋三が組閣する三回目の内閣の組閣が生じる」(無時間) はやはり真であれば必然であり、偽であれば不可能である。したがって、この記述に合致する出来事が生じるかどうかは決定されている、という議論が誘発される。ただ、ここで必然的とされるのは固定的に指示された出来事ではないので、決定のレベルがその点で下がると考えられるかもしれない。指示されているのは、記述を満す出来事であれば何でもよいので、その点で決定には幅があるというわけである。しかし、記述を詳細にして決定している出来事の幅を狭めることはいくらでもできるわけであり、固定的指示の欠如が決定の度合いを低めるとは言い難い。

他方、テンスを伴わない無時間的な命題を認めないとするならば、未来形の命題について真、偽について同様に対称的な議論は構成できない。たとえば、「安倍晋三が組閣する三回目の内閣の組閣が生じるだろう」(未来形) は、仮に今(2014年現在)真である場合でも、その組閣の後では、(未来形であるかぎ

^{*16} もちろん、この命題で「安倍晋三」は固定指示詞として機能している。しかし、これらは現在存在している人を固定的に指示するのであって、未来の出来事を指示するのではない。

り) すくなくとも真ではなく、したがって今必然ではない。他方、これが偽の場合は、不可能である。だから、この場合決定論的含意が問題になるのはやはり (B) の問題、反実可能性 (実現しない可能性) が排除されるという面に限られる。

4.2.2 三つの時制と無時間性

ディオドロスの理論においては、たしかに必然でも不可能でもない真なる命題が存在する。したがって、真なる命題はすべて必然になる、というようなことはない。たとえば、「(今) 昼である」はそのような命題であることはすでに見た。また、実際に今生じている事柄を述べている文は今真であるけれども今必然だとは限らないし、今実際には生じていない事柄を述べる命題は今偽であるけれども今不可能だとは限らない。たとえば、今私がカレーを食べているとして、「私は今カレーを食べている」は今真だが今必然ではないかもしれないし、「私は今ラーメンを食べている」は今偽だが今不可能ではないかもしれない。私がカレーを食べていない時点が今より後に一つでもあれば前者の命題は必然ではなく、今より後に私がラーメンを一度でも食べるなら後者の命題は不可能ではない。

問題は、未来命題であるが、ある出来事の生じる、生じないが必然となり、その意味ではっきりと決定論的含意を持つと判定できるのは、すでに見たように、(今) 偽である未来命題だけである。今真である未来命題は、どの時点であれ必然であるとは限らないが、今偽である未来命題は、今から永遠に不可能であり、二度と可能になることはないのである。この問題が当時批判的であったことは何度も述べた。

前者の今真である未来命題については、必然性が導かれるという意味では決定論的含意は持たない。しかし、これは見かけ上のことであって、ある出来事が生じることを述べる未来命題が真である場合、実質的にはその出来事が不可避であることが帰結すると思われるかもしれない。たとえば、多重実現可能性を持たない命題、「太郎は卒業式に遅刻するだろう」を考えてみよう。この命題が真であるとしても必然でない理由は、卒業式以後の時点においてこの未来形の命題はすくなくとも真ではないから、というものであった。しかし、未来命題は真ではないとしても、卒業式の時点ではもとの未来命題と同じ出来事に言及する現在形の命題「太郎は卒業式に遅刻している」(現在形) が、そして卒業式の後の時点では、やはり同じ出来事に言及する過去形の命題「太郎は

卒業式に遅刻した」が未来命題の代りに真となり、後者はこの後永遠に必然である。これら三つの命題はすべて真であり、三つの命題の TM は同じ一つの出来事、つまり太郎の卒業式への遅刻である。ディオドロスの必然性の本質は、「これからずっと真である」ことにあるが、この三つの命題を実質的に同じ命題とみなすなら、三つのいずれかは「これからずっと真である」のだから、実質的には太郎の卒業式への遅刻という出来事は必然である、と考えられないだろうか。これは三つの命題の中身を束ねて一つの永遠命題「太郎は卒業式に遅刻」（無時間）と表現することが許されるなら、その一つの命題が必然であることに対応している。

これに対して、おそらくディオドロスは未来形、現在形、過去形で表現された命題は、あくまで三つの異なる命題であることを主張するであろう。そして、ディオドロスや彼の論敵がテンスを持たない無時間的な永遠命題を認めないなら、(A) の未来の出来事が必然になると論じるという方法でディオドロスを批判するのは困難である。ディオドロスの様相理論からは、一見簡単に決定論的含意を導けるように見えるが、(A) の場合においてそれを言うには、無時間的な永遠命題を認めることが必要であり、その手立てを持たなかった当時の哲学者たちが、批判の矛先をもっぱら (B) における反実可能性の拒否に向けたのはやはり当然のことだったのである。